日本語學研究 第64輯(2020. 6. 20. pp.53~69) http : //dx.doi.org/10.14817/jlak.2020.64.53

ICTを活用した遠隔接触場面における日本語学習者と母語話者の聞き手言語行動*

李舜炯**

〈 Abstract 〉

Japanese Listeners' Linguistic Behavior of Japanese learners and native speakers on Distance Contact Situation utilizing ICT

The purpose of this study is to empirically analyze and review through comparison of how Korean learners of Japanese and native speakers of Japanese operate Listeners' Language Behavior in the remote contact situation utilizing the video conference system which can provide a vision and an audio at the same time unlike the telephone call which provides an audio only.

The main results of the analysis and review are as follows.

1. In terms of the use of Aizuchi (Back-channels; Responsive tokens), Korean Japanese learners are found to use them 2 times or more in the in-person contact situation (33.8%) than in the remote contact situation (16.3%). In contrast, native speakers are found to use them more frequently in the remote contact situation (83.7%) than in the in-person contact situation (66.2%).

2. In terms of the appearance position of Aizuchi (Back-channels, Responsive tokens), both Japanese learners and native speakers show a higher frequency rate 'when utterances shift' than 'during the other speaker's utterances' in the remote contact situation, whereas show a higher rate 'during the other speaker's utterances' than 'when utterances shift' in the in-person contact situation. Furthermore, even though it was limited to one learner, the use of co-construction responses while utterances shift has been observed, which confirms learners' various usages of Aizuchi, like native speakers do, regardless whether it is remote or in-person.

3. In terms of the expression type and function of Aizuchi, both Japanese learners and native speaker are found to use emotional back-channel expressions and conceptional back-channel expressions most frequently. Regardless of the contact situation and the appearance position, native speakers are found to use Aizuchi more frequently than Japanese learners. Further, regardless of the contact situation, the native speakers use the 'consent' or 'understanding' function when utterances shift, thereby set up a base for the next utterance, whereas they actively use the 'listening' function 'during the other speaker's utterances', thereby facilitate the other speaker's ongoing discourse.

4. It is confirmed that in the remote contact situation, Japanese learners tend not to use the target language whereas native speakers show a frequent use of it.

Field : Sociolinguistics

Keywords : ICT-based, Listeners' language behavior, Distance contact situation, Face to face contact situation, Japanese learners

* This work was supported by the Ministry of Education of the Republic of Korea and the National Research Foundation of Korea(NRF-2018S1A5B5A07072848)

** 慶北大学校 講師, 社会言語学

www.kci.go.kr

1. はじめに

昨今では、情報コミュニケーション技術(Information and Communication Technology：ICT)の急速な発展に伴いそれを研究や学びのリソースの一つとして活用する機会が増えてきている。例えば、国際交流会議、共同研究の打ち合わせ、海外の就職や進学のための面接などでWeb会議/面談(Skype、Zoom)などの活用が報告されている。そして、次の写真に見られるように、就職対策を目標とした日本語授業においても韓国国内に居ながら日本と気軽に繋がることができるテレビ会議システム(Video Conference:VC)が積極的に取り入られている。



〈図1〉 テレビ会議システムを活用した就職対策のための日本語授業

このように、ICTのめざましい発展に伴い、日本語学習者は電子メール、テレビ電話、テレビ会議システムなど、ICTを介して空間をまたいだ遠隔コミュニケーション(以下、「遠隔接触場面」)をする機会が増えてきている。特に、テレビ会議システムは、マルチメディア通信、ネットワークの新しい交信手段の一つとして期待を集めており、日本語教育でも積極的に活用されている。その理由は、お互いの顔を見ることができる、双方向の意思疎通が可能である、リアルタイムで行われる同時性という会話参加者が同一の空間を共有する対面コミュニケーション(以下、「対面接触場面」)の特徴をすべて備えているからである。

しかし、テレビ会議システムが映像と音声を同時に提供するとはいえ、完全に「対面接触場面」と同質の意思疎通が可能であるとは言い難い。実際、李舜炯(2017)では「テレビ会議システム」を活用した遠隔教育に参加した韓国人日本語学習者の授業後のレポートを分析し、その長所と短所が紹介されている。そこで、学習者は「①画面を見ながら音声を同時に聞くことができたので、学習が容易で退屈しなかった、②顔を合わせて授業が行われたため、双方向コミュニケーションができた、③リアルタイムでフィードバックを交わすことができた」などのメリットを指摘している。しかし、その一方では「❶同空間でしか生まれない共感形成がたまにできないことがあった、❷発話意図を示したが、相手（日本側）が気付かなかった、❸空間的距離の問題でグループディスカッションの際、相手の話に集中するのが難しかった」などのデメリットにも言及している。

www.kci.go.kr

したがって、日本語学習者が「遠隔接触場面」で目標言語である日本語を駆使し、円滑なコミュニケーションをするためには混乱も少なくないことが予測できる。その裏付けとして、福永(1993)、尹智鉉(2002)、柏倉(2016)などにより、空間の非共有、視線の不一致、映像や音声の時間的ずれ、不安や緊張感などの心理的影響などのコミュニケーションの阻害要因が分析されている。また、吉田(2011)では、遠隔接触では視覚情報を伴うコミュニケーションができるという点で、対面接触に近いとは言え、画質や画面の大きさ、音声や映像のずれなどの技術的な制約のため、非言語による反応や情報の送・受信が困難であり、対面接触とは異なる会話の構築が現れると指摘されている。さらに、李舜炯(2017)では、学習者の授業後のレポートから遠隔授業における学びの一つとして自然な日本語(特に、あいづちなどの反応の仕方)について毎回のように遠隔講師やファシリテーターからのフィードバックがあったことが報告されている。このような状況を受け、聞き手言語行動においても「対面接触場面」では見られない特徴や問題点などが起こりうる可能性が考えられる。

そこで本稿では、「遠隔接触場面」における韓国人日本語学習者と日本語母語話者が運用する聞き手言語行動に注目し、「対面接触場面」における聞き手言語行動との異なりを分析、考察することを目的とする。

以下に、本稿の流れを示しておく。2.では先行研究を概観し、本章の研究課題と目的を明らかにする。3.では聞き手言語行動の表現形式と機能を分類、分析に使用するデータの内訳を提示する。4.では接触場面、出現位置、分類、目標言語と母語の差について分析と考察を進め、5.では本稿をまとめる。

2. 先行研究の検討および問題の提起

これまで相互作用の観点から日本語の会話において聞き手の行動に関する研究は、言語行動のみではなく非言語行動にいたるまで多様であるが、その大部分は会話参加者が同一の空間を共有する「対面接触場面」での分析である(李舜炯2016、2018など)。

一方、「遠隔接触場面」におけるあいづちや会話構造を分析した研究としては、尹智鉉(2005)、吉田(2011)が挙げられる。

尹智鉉(2005)は、日本国内に滞在する日本語学習者(中級4名、上級4名)と母語話者(4名)を対象にテレビ会議システムを介した遠隔コミュニケーションにおいてどのようにあいづちを使用しているのか、対面との比較分析を行っている。ここでは、母語話者と非母語話者が参加した「遠隔」と「対面」コミュニケーションにおいて、最も多く使用されるあいづちは「あいづち」詞(本稿でいう感性的あいづち表現および概念的あいづち表現)であると言及されている。また、「遠隔」と「対面」という接触場面の種類に関係なく、「あいづち」詞が占める割合が高く特に非母語話者は中級・上級という学習能力のレベルに関係なく、母語話者よりも「あいづち」詞への依存度が高いと分析されている。さらに、出現場所では発話文の終了後〉発話と発話の間〉発話文中の発話の一部と重なる場合の順に多く現れ、これが日本語学習者にも母語話者にも共通するという。ただ、発話文中の発話一部と重なる場合は対面より遠隔で使用が多いことが確認できているが、発話終了後と発話と発話の間での使用に関しては遠隔と対面の違いがはっきりしていないことが分かった。

次に、吉田(2011)は、日本語母語話者とフランスの大学で日本語を専攻する学習者との多者間の遠隔場面と、1対1遠隔場面におけるコミュニケーション問題について比較分析している。特に、映像と音

www.kci.go.kr

声のズレ、ハウリング、接続不良などの音声要因がもたらす通信の問題の一つとして、あいづち表現と発話交替（turn-taking）について言及している。インターネットの接続状況によって映像と音声が遅延した際、日本語母語話者のあいづちが不自然な位置で現れ、結果的に日本語学習者の発話と重複して理解しづらくなるという結果を招くと指摘する。また、遠隔接触では、話者交替に役立つ標識と合図が対面接触より把握するのが困難な場合が多いため、発話交替（turn-taking）と関連した相互交渉の問題が生じやすいと主張している。

以上の先行研究の検討から、次のような議論の余地が残されていると考えられる。接触場面に関係なく日本語学習者の「あいづち」詞の使用が母語話者より多いという尹智鉉の主張と遠隔場面では日本語母語話者のあいづちが頻繁になるという吉田の主張は一見相反するするように見られる。また、尹智鉉(2005)により、聞き手言語行動のうち「あいづち」詞という表現形式の使用が多いことは明らかになっているが、それらの表現形式がどのような機能を担っているのかについては記述されていない。さらに、発話交替(発話終了後)と発話途中という聞き手言語行動の出現位置と遠隔と対面という接触場面との相関についての分析も要求される。

そこで本稿では、ICTを活用した遠隔接触場面における韓国人日本語学習者と日本語母語話者の聞き手言語行動を実証的に考察するために、次の４つを研究課題とする。

1. 遠隔と対面といった接触場面による使用差はあるのか。
2. 発話交替と発話途中といった出現位置による使用差はあるのか。
3. 表現形式と機能による使用差はあるのか。
4. 目標言語と母語による不使用と多用はあるのか。

3. 研究方法

3.1 本稿における聞き手言語行動の定義

李舜炯(2016：29)を参考に、聞き手と聞き手言語行動を以下のように定義する。「聞き手」とは、発話の主導権をもっている話し手の発話を受け、あいづち的反応だけではなく、「先取り」「言い換え」「繰り返し」「問い返し」「遮り」などの共話的反応を返すものであると定義する。また、「聞き手言語行動」とは、このような聞き手が話し手に対して行うあいづち的反応、共話的反応の型を用いて行う発話であると定義する。

3.2 本稿における聞き手言語行動の分類

本稿では、あいづち的反応、共話的反応を中心とする聞き手言語行動の特徴を把握するために、これまでのように言語形式だけに注目するのではなく、その形式が担っている機能も合わせて分析し聞き手言語行動の全体的な運用を把握する。そのため、李舜炯(2016)を参考に聞き手言語行動の分類も次の表1のようにまとめ、その表現形式と機能を分析した。

www.kci.go.kr

〈表1〉　聞き手言語行動の表現形式と機能

		表現形式	機能
聞き手言語行動	あいづち的反応	①感声的あいづち表現 ·あ系　：あ、あー、あーあー、など ·うん系：うん、うんうん、ん、うーん、など ·え系　：え、えー、ええ、など ·はい系：はい、はいはい、はあ、はーはー、など ·ふーん系：ふーん、ふん、ふんふん、など ·へー系：へえ、へー、など ·ほー系：ほー、ほーほー、など	a. 傾聴表示 ·「話についていっている」の表示 b. 理解表示 ·情報確認の表示 ·気持ち了解の表示 ·知識共有の表示 c. 同意表示 ·共感の表示 ·納得の表示 d. 否定表示 ·否定的な気持ち、疑いの表示 e. 感情表示 ·興味・関心の表示 ·感情(違和感、驚き、喜び、意外など)の表示
		②概念的あいづち表現 ·そうです系：そういうことです、そうなんです、そうなんですよ、そうだったんですか、そうですね、そうですよね、そうなんですね、そうなんですよね、など ·丁寧な文末系(以下、ですね文末系と称す)：本当ですよ、本当ですよね、すごいですね、いいですね、いいんじゃないですか、ですね、ですよね、など ·そう系：そう、そうそう、そうだよ、そうなんよ、そうかね、そうか、そっか、そっかそっか、そうね、そうよね、そうやね、そうやな、そうだね、など ·くだけた文末系(以下、ね文末系と称す)：本当ね、本当にね、本当だよね、いいよ、いいじゃん、いいね、だろう、だろうね、だよね、ねー、など ·いや系：いえいえ、いや、やー、など ·なるほど系：なるほど、なるほどね、なるほどなるほど ·確かに系：確かに、確かにね、確かに確かに	
		③言い換え：話し手発話と同じ内容を別の言い方で表現する発話 ④繰り返し：話し手発話を同じ言い方で反復する発話 ⑤先取り：話し手発話の先を予測して言う発話	
	共話的反応	❶問い返し：話し手発話について質問する発話 ❷遮り　：話し手発話を途中で中断させる発話 ❸言い換え：話し手発話と同じ内容を別の言い方で表現する発話 ❹繰り返し：話し手発話を同じ言い方で反復する発話 ❺先取り　：話し手発話の先を予測して言う発話	a.確認：話し手もしくは聞き手の情報について発話内容を確認する役割 b.話し手助け：話し手の言い淀みまたは長い間を助ける役割 c.同意：話し手の発話内容と自分の考えや意見が同様であることを示す役割 d.補足：話し手の発話内容に対して知らない情報を付け加える役割 e.共感：話し手の発話内容に対し、共感を示す役割 f.反論：話し手の発話内容と自分の意見が同様でないことを示す役割 g.理解：話し手の発話内容に対し理解を示す役割

3.3 調査概要

本稿で調査対象としているのは、大学卒業後に日本の企業で働くことを目指し、韓国の大学で日本語を専攻している韓国人日本語学習者グループ(学部3、4年生4名)と、日本の大学に在籍し就職活動中の日本語母語話者グループ(学部3、4年生2～4名)をテレビ会議システム繋いだ遠隔授業である。遠隔授業は、2017年4月～7月までの期間で、90分週1回で、前半10回はテレビ会議システムによる遠隔授業、後半5回は現場実習による対面授業を混合したブレンディッドラーニングで行われた。

遠隔コミュニケーションでは「学生と社会人の違いを5つ挙げる(15分)」と「コンビニの売り上げを2倍にする(30分)」をテーマにした「遠隔接触場面(45分)」をデータとした。また、対面コミュニケーションでは、遠隔グループディスカッションに参加した同一の韓国人日本語学習者と母語話者の会話を収録した「対面接触場面(3人×15分＝45分)」をデータとした。具体的な調査データの概要は次の表2の通りである。

www.kci.go.kr

〈表2〉 調査データの概要

	遠隔接触場面	対面接触場面
データの特徴	遠隔ディスカッション	対面雑談
データ数(総分数)	2本(45分)	3本(45分)
総発話回数	549	520
視聴覚付き	動画・音声	音声
あいづち的反応の出現数	178(32.4%)	260(50.0%)
共話的反応の出現数	14(2.6%)	22(4.2%)

3.4 分析方法

3.3の録画データと音声データをエクセルで文字化作業を行い、3.2の表1の聞き手言語行動の分類に従い、接触場面、出現位置、日本語学習者、日本語母語話者などによってその使用頻度を算出した。また、宇佐美(2011)に従った文字化作業とともに、先行研究で指摘があった学習者の聞き手言語行動の乏しさの把握、母語話者の多用などを確認する必要があったため、聞き手言語行動の欠如、不使用、多用などについて判定も行った。判定については筆者(遠隔授業のファシリテーター)と文字化作業や会話に参加した日本語母語話者の協力を得て、判定の意見が一致する例のみを採用した。

4. 分析と考察

本節では、2.で研究課題として取り上げた、接触場面によるあいづち的反応の使用差(4.1)、出現位置によるあいづち的反応の使用差(4.2)、表現形式と機能による聞き手言語行動の使用差(4.3)、遠隔場面における目標言語と母語による不使用と多用(4.4)について、それぞれ分析と考察を行う。

4.1 接触場面によるあいづち的反応の使用差

次の〈表3〉は、韓国人日本語学習者と日本語母語話者の接触場面(遠隔/対面)によるあいづち的反応(感声的あいづち、概念的あいづち、言い換え、繰り返し、先取り)の使用差はあるのかについて分析し、その結果をまとめたものである。

韓国人日本語学習者と日本語母語話者の全体的な使用回数から比較すると、韓国人日本語学習者の使用率は26.7%、日本語母語話者は73.3%を占めており韓国人日本語学習者より3倍近く使用が多いことが分かった。また、このような日本語母語話者優勢の使用傾向は、対面接触場面においても韓国人日本語学習者(33.8%)対日本語母語話者(66.2%)という割合で2倍ほど多く、遠隔接触場面においては韓国人日本語学習者(16.3%)対日本語母語話者(83.7%)という割合で5倍以上多くなっている。さらに、韓国人日本語学習者は遠隔(16.3%)より対面(33.8%)で2倍以上使用が多い一方、日本語母語話者は対面(66.2%)より遠隔(83.7%)で高い割合を示していることが分かった。

www.kci.go.kr

〈表3〉接触場面によるあいづち的反応の使用傾向　(出現回数(%)：以下、同一)

場面	韓国人日本語学習者 (KJL)	日本語母語話者 (JNS)	計(%)
遠隔	29(16.3)	149(83.7)	178(100%)
対面	88(33.8)	172(66.2)	260(100%)
計	117(26.7)	321(73.3)	438(100%)

このような結果から、遠隔接触場面において、韓国人日本語学習者はあいづち的反応の不使用という回避ストラテジー、日本語母語話者は多用という共同協力ストラテジーを用い、遠隔接触場面のコミュニケーションを調整していることが分かる。学習者のあいづち的反応の不使用については、先述した李舜炯(2017：124-125)の遠隔授業に参加した学習者の授業後のレポートからあいづち的反応の乏しさについて毎回のように遠隔講師やファシリテーターからのフィードバックがあったという指摘を支持する結果に繋がる。また、日本語母語話者の協働協力については、「映像や音声が遅れてしまう場合、日本語母語話者のあいづちが繰り返し不自然な位置に生じる(吉田2011：186)」という報告からも推察される。つまり、日本語母語話者は機械的なトラブルが起きた場合、それを回復する手段の一つとして積極的にあいづちを打ち、学習者との発話重複を招いてしまうということだと考えられる。本調査における遠隔接触場面はリアルタイムでお互いの顔を見ながら授業が行われたため、双方向コミュニケーションができるとはいえ、物理的な空間を超えるには対面コミュニケーション同様のストラテジーでは限界があり、遠隔での円滑なコミュニケーションのため、日本語母語話者はより頻繁にあいづち的な反応を行っている可能性が高いと考えられる。

4.2 出現位置によるあいづち的反応の使用差

次の〈表4〉は、韓国人日本語学習者と日本語母語話者の出現位置(発話交替時/発話途中)によるあいづち的反応について、その結果をまとめたものである。

韓国人日本語学習者と日本語母語話者のあいづち的反応の使用における出現位置において最も注目すべき点は、遠隔接触場面における韓国人日本語学習者のあいづち的反応の出現数が発話交替時(21回：11.8%)、発話途中(8回：4.5%) という結果で極めて少ないことである。1.で先述した遠隔授業の中で学習者のあいづち的反応の欠如についてフィードバックされたこともこの出現率に起因することが分かった。韓国人日本語学習者は発話意図を示しても相手（日本側）が気付かない場合が多く、空間的距離の問題で相手の話に集中するのが容易ではなかったと考えられる。特に、発話途中では、同じ空間を共有していないこともあり、あいづち的反応を行うことが難しかったということになるだろう。

次に興味深い点は、両者とも遠隔接触場面では発話交替時での使用が多く、対面接触場面では発話途中での使用が多くなるという共通した使用傾向が見られたことである。韓国人日本語学習者の場合は、使用数が少ないこともあって割合は高くないが、遠隔では発話交替時(11.8%)〉発話途中(4.5%)と発話交替時が多く、対面では発話交替時(12.0%)〈発話途中(18.9%)と発話途中での使用が多くなっている。また、日本語母語話者の場合は、遠隔では発話交替時(59.6%)〉発話途中(24.2%)と、発話交替時が多く、対面では発話交替時(24.2%)〈発話途中(41.9%)と、発話途中での使用が多いことが確認できた。吉田(2011)によると、遠隔接触では、話者交替に役立つ標識と合図が対面接触より把握困難な場合

www.kci.go.kr

が多いため、発話交替（turn-taking）と関連した相互交渉の問題が生じやすいというが、今回の調査で出現した割合には韓国人日本語学習者と日本語母語話者による差があるものの、比較的あいづち的反応を行いやすい発話交替時での使用が多くなるということを明らかにした。遠隔接触という物理的な問題を抱えながらも、相手の発話終了後に「発話権を取り、積極的かつ有効に談話を促進し(李舜炯2018：260)」相手との円滑な相互行為を構築していることが見てとれよう。

さらに、対面接触場面では、両者とも相手の発話途中でのあいづち的反応を多く行い、発話権を取らず相手の談話継続を促している傾向が確認できた。このように対面接触場面で相手の発話途中にあいづち的反応が多いということは、初対面の日韓接触場面を分析した李舜炯(2018)の主張を支持する結果となった。

〈表4〉出現位置によるあいづち的反応の使用傾向

出現位置 / 場面	韓国人日本語学習者（KJL）		日本語母語話者（JNS）		計(%)
	発話交替時	発話途中	発話交替時	発話途中	
遠隔	21(11.8)	8(4.5)	106(59.6)	43(24.2)	178(100%)
対面	30(11.5)	58(22.3)	63(24.2)	109(41.9)	260(100%)
計	51(11.9)	66(12.9)	169(39.6)	152(35.6)	438(100%)

一方、発話交替時における韓国人日本語学習者と日本語母語話者の共話的反応の運用では次のような傾向が見られた。

水谷(1988：10)は、会話の相互作用に関心が持たれるようになってから、聞き手が積極的に協力する協調的な会話スタイルを共話と名付け、日本語会話の特徴のひとつとした。共話は「もう、そろそろ桜…」という発話を引き取り、「咲きそうですね」と完成するような、2人以上の会話参加者が一つの発話を共同で作り上げていくという相互作用の産物である。共話は、先行発話が話し手または聞き手により中途終了しており、後行発話である共話的反応が抜き取られると話の前後の流れが分からなくなる会話形態である(李舜炯2016：32-33)。

4.3 表現形式と機能による聞き手言語行動の使用差

ここでは、3.の〈表1〉の聞き手言語行動の分類枠に従い、聞き手言語行動の表現形式と機能による使用傾向を見てみたい。

まず、あいづち的反応の表現形式と機能から見てみたい。次の〈表5〉は、韓国人日本語学習者と日本語母語話者の表現形式と機能によるあいづち的反応について、その結果をまとめたものである。個別の多様な表現形式を感声的あいづち表現(はい、あー、ええ…)、概念的あいづち表現(そうですね、なるほど…)、繰り返し、言い換え、先取りに分けて提示した。そして機能は「傾聴」「理解」「同意」「感情表出」「反論」に分け、その使用回数と割合を示したものである。

www.kci.go.kr

〈表5〉表現形式と機能によるあいづち的反応の使用傾向（K:KJL, J:JNS, 空欄はゼロ）

場面	出現位置 / 機能 / 形式	発話交替時										発話途中										計（回 %）
		傾聴		理解		同意		感情表出		反論		傾聴		理解		同意		感情表出		反論		
		K	J	K	J	K	J	K	J	K	J	K	J	K	J	K	J	K	J	K	J	
遠隔	感声的あいづち表現		2 2.1	1 1.0	**20** **20.6**	11 11.3	14 14.4					1 1.0	**15** **15.5**	7 7.2	**23** **23.7**		3 3.1		1 1.0			97回 100%
	概念的あいづち表現				**11** **16.2**	5 7.4	**42** **61.8**	3 4.4	5 7.4								1 1.5				1 1.5	68回 100%
	繰り返し				7 58.3		2 16.7		3 25.0													12回 100%
	言い換え			1 100																		1回 100%
	先取り																					
	計		2 1.1	2 1.1	**38** **21.3**	16 9.0	**58** **32.6**	3 1.7	8 4.5			1 0.6	15 8.4	7 3.9	23 12.9		4 2.2		1 0.6		1 0.6	178回 100%
対面	感声的あいづち表現			2 1.3	3 1.9	9 5.7	4 2.5		2 1.3			11 7.0	**58** **36.7**	18 11.4	17 10.8	12 7.6	9 5.7	4 2.5	9 5.7			158回 100%
	概念的あいづち表現			2 2.2	**18** **19.8**	6 6.6	**24** **26.4**	4 4.4	8 8.8	3 3.3	1 1.1			4 4.4	5 5.5	6 6.6	5 5.5	2 2.2	2 2.2	1 1.1		91回 100%
	繰り返し			1 16.7		2 33.3			1 16.7								2 33.3					6回 100%
	言い換え			1 33.3	1 33.3										1 33.3							3回 100%
	先取り				1 50.0		1 50.0															2回 100%
	計			6 2.3	23 8.8	17 6.5	29 11.2	4 1.5	11 4.2	3 1.2	1 0.4	11 4.2	**58** **22.3**	22 8.5	23 8.8	18 6.9	16 6.2	6 2.3	11 4.2	1 0.4		260 100%

尹智鉉(2005：254)は「接触場面の種類に関係なく、『あいづち』詞が占める割合が最も高く、NNSはNSよりも「あいづち」詞への依存度が高い」と指摘している。確かに、〈表5〉の結果からも、遠隔接触場面でも対面接触場面でも感声的あいづち表現と概念的あいづち表現の使用が最も多くなっていることが分かる。ただ、遠隔/対面という接触場面に関係なく、発話交替時/発話途中という出現位置に関係なく全ての場合において、韓国人日本語学習者ではなく日本語母語話者の使用が多くなっている。そして、これらの高い割合を占める感声的あいづち表現と概念的あいづち表現の機能を合わせてみると、遠隔―発話交替時では、「同意(76.2%)」〉「理解(36.8%)」機能が多く、対面―発話交替時でも同じく「同意(28.9%)」〉「理解(21.7%)」機能が多いことが明らかになった。また、遠隔―発話途中では「理解(23.7%)」〉「傾聴(15.5%)」機能が多く、対面―発話途中では「傾聴(36.7%)」機能がさらに増えていることが確認できた。このような結果から、接触場面に関係なく、日本語母語話者は発話交替時ではあいづち表現を用い「同意」や「理解」を示しつつ、次の発話への足がかりを作っていると見られる。そして、発話途中では相手の話を「傾聴」することで相手の話の展開を促していると考えられる。

次に、聞き手の積極的かつ協調的で日本語会話の特徴とされる共話的反応を韓国人日本語学習者は遠隔/対面接触場面に関係なく使用していることが分かった。先述3.2の〈表1〉で提示した共話的反応の分類のうち、今回、その使用が確認できた表現形式と機能をまとめると次の〈表6〉のようになる。これまで見てきたようなあいづち的反応とは比べものにならないほど使用数は少ない。ただ、使用している共話的反応

www.kci.go.kr

の表現形式や機能の種類は日本語母語話者並みにバラエティに富んだ使用傾向が見てとれよう。

〈表6〉表現形式と機能による共話的反応の使用傾向

場面	機能／形式	韓国人日本語学習者(KJL)				日本語母語話者(JNS)				計回数
		確認	同意	補足	相手助け	確認	同意	補足	相手助け	
遠隔	先取り			2		1	3			6
	問い返し	2								2
	言い換え			1		1		2	1	5
	繰り返し				1					1
計		2		3	1	2	3	2	1	14
対面	先取り	1		2	1	1	3	1		9
	問い返し	5				2				7
	言い換え						2		1	3
	繰り返し						2	1		3
計		6		2	1	3	7	2	1	22

では、ここで、遠隔接触場面で使用している韓国人日本語学習者の「先取り(2)」「問い返し(2)」「言い換え(1)」「繰り返し(1)」といった、6回の共話的反応のうち、2例ずつ現れた「問い返し」と「先取り」の会話例を見てみたい。

まず、会話例1)は「スタンプラリー」と言いさした日本語母語話者(J2)の発話意図を聞き手(K1)が理解し「それを集めるために買いたくなる人もいるんじゃないですか」と問い返す形で相手に確認を取っている。

会話例 1) コンビニの売り上げをあげるための遠隔会話：J2(JNS)-K1(KJL)

1 J2:スタン<プラリー>{>},,
➡ 2 K1:<それを>{>}集めるために買いたくなる人もいるんじゃない<ですか>{<}。
3 J2:<うん>{<}、キャラクターのものにしてみたり(K1 はいはい)そういう感じですね。

会話例2)は「˜何種類か」と言いよどんだ日本語母語話者(J3)の発話の意図を予測し、聞き手(K1)が「それによって選べるというたぶんもっと」というふうに、相手の発話を補足していることが分かる。

会話例 2) コンビニの売り上げを挙げるための遠隔会話：J3(JNS)-K1(KJL)

1 J3:いいですね、何種類か…
➡ 2 K1:それによって選べるというたぶん<もっと>{>},,
3 J3:<アイドル>{>}の選んだらアイドルのグッズがもらえるっていう,,,

しかし、ここで会話例1)、会話例2)で確認できるように、6回にわたるすべての共話的反応は韓国人日本語学習者K1一人だけに限ったものであった。つまり、表現形式も機能も日本語母語話者同様に使用しているかのように見えるのは、実際は全て一人の韓国人日本語学習者によるものであることが分

www.kci.go.kr

かった。(会話例で「…」の記号は、音声的に言いよどんだように聞こえるものを、「〈　　〉{〈}」の記号は、同時発話され重ねられた発話を意味する。また、会話例の先頭にある「[」は共話を成していることを表す。)

それに対し、対面接触場面における共話的反応は学習者K1だけに限らず、次の会話3)に見るように、学習者K3をはじめ参加者全員が一人当たり2回以上は使用していることが確認できた。会話例から韓国人日本語学習者は「おー」「はい」など、相手の発話途中のあいづち的反応を行っている。また、1J1の「一方的じゃなくて、～」という発話を受け、2K3に見られるように「お互いに」という違う表現で言い換え、共話的反応を行いながら積極的に会話に参加していることが確認できる。

会話例 3) 遠隔授業経験談について対面会話：J1(JNS)-K3(KJL)

1J1:そうですね、その一遠隔授業が、そのインドネシア以来だったので、まずその最初教室入って、その距離がすごい近くて、(**おー**)びっくりしました。〈笑い〉でけっこう(**はい**)その、会話いろいろ、そのーなんだろう、一方的じゃなくて、〈普通に会話できた〉{〉},,

➡ 2 K3:〈お互いに〉{〉},,

3 J1:そうそうそう、がいいなーって思いました。

このように遠隔/対面における共話的反応の使用傾向からも、やはり、遠隔接触場面という空間をまたいだ学習環境では対面よりはコミュニケーションが難しいことが窺える。ただ、遠隔環境の中でも聞き手として共話的反応を行いながら、談話の方向づけや談話の展開を定める役割を果たす学習者が1人でもいたことは注目に値する。

4.4 遠隔場面における目標言語と母語による不使用と多用

先述した通りに、遠隔接触場面における聞き手言語行動の問題点として、遠隔授業で韓国人日本語学習者のあいづち的反応の欠如について日本側の母語話者からフィードバックされたこと(李舜炯2017)、また、音声のハウリング、映像の物理的な問題が起きると日本語母語話者のあいづちずれが多くなり発話重複が生じること(吉田2011)、さらに、学習者も母語話者もあいづちと発話との重なりが対面より遠隔で多いこと(尹智鉉2005)などがこれまで指摘されてきた。

そこで本節では、先行研究で指摘があった学習者の聞き手言語行動の乏しさの把握、日本語母語話者の多用などを確認する必要があったため、聞き手言語行動の欠如、不使用、多用などについて判定した結果、次の〈表7〉のようにまとめられた。判定については3.4で先述した通りに筆者と文字化作業や会話に参加した日本語母語話者の協力を得た。

〈表7〉遠隔接触場面におけるあいづち的反応の不使用と多用

出現位置 / 場面	学習者の不使用(ϕ)		日本語母語話者の多用(❀)	
	発話交替時	発話途中	発話交替時	発話途中
遠隔	18	31	18	8

www.kci.go.kr

上記、表から確認できるように、遠隔接触場面において韓国人日本語学習者のあいづち的反応が必要なのに、反応の不使用が合計49箇所見られた。(会話例の中で (φ) で示す)。そのうち、次の会話例4)のように相手の発話途中が31箇所、会話例5)のように発話交替時の不使用が18箇所で確認できた。また、日本語母語話者が「うんうんうん」と連発し、あいづち的反応の多用と見られるところにが合計26箇所であった。(会話例の中で (❀)で示す。)

では、まず、韓国人日本語学習者の遠隔接触場面における不使用について見てみたい。

会話例 4) コンビニの売り上げをあげるための遠隔会話：J1,J2(JNS)-K(KJL一同)

1 J1:えっと、まずどうしましょう。コンビニの、(韓国側一同 **はい**)ひとつのコンビニの売り上げを2倍にするのか、コンビニ業界の、業界自体の売り上げを2倍にするのかとかいろいろなんか絞れると思うんですけど、(φ) 聞こえますか？

➡2 K(一同):はい、聞こえます。

3 J2:どうしますか。

会話例4)は、遠隔接触場面のやりとりのなかで母語話者はφで示した箇所であいづち的反応を期待したものの、反応がなかったので、遠隔コミュニケーションにトラブルが生じたと判断し「～聞こえますか?」という積極的な発話を用いながらトラブルに対処している場面である。日本語母語話者は最初の1J1で「コンビニの～」と発話文中のポーズの箇所で「はい」というあいづち的反応が遠隔地の学習者全員からあったので、「～思うんですけど、」という発話文中のポーズの箇所でも当然とあいづち的反応を期待していたという。しかし、学習者側の誰からもあいづち的反応がなかったので、聞き取りや理解にトラブルが生じたと判断し「～聞こえますか」と、相手側に状況確認の対処を行ったという。

また、次の会話例5)は、先述の対面コミュニケーションの会話例3)と同一の話者同士が遠隔コミュニケーションを行った際の一部を示したものである。韓国人日本語学習者K3は1J1の日本語母語話者の発話途中はもちろんのこと、2K3で見るように、相手の発話を遮り実質的な発話を始める際も、「はい」や「そうですね」のようなあいづち的反応は一切使用していない。「日本みたいに「限定」にするのもいいですね」と、直ちに実質的な発話で反応している。もちろん、1J1と2K3の発話は共話を成しているわけでもない。(会話例の中で示した「【【 】】」は、先行話者の発話が完結する前に途中で挿入される形で後行話者の発話が始まり、結果的に先行話者の発話が終了したことを意味する)

会話例 5) コンビニの売り上げをあげるための遠隔会話：J1(JNS)-K3(KJL)

1 J1:そうですか。じゃ、コンビニの売り上げをあげる方法として、1＋1のシステムを〈導入するとい{〈} 【【

➡ 2 K3:φ 】】〈日本みたいに〉{〉}「限定」にする(**はい**)のもいい,,

3 J1:なるほど、そうですね、どちらも可能性の高いアイディアですね

ここで会話例4)や会話例5)のような韓国人日本語学習者の聞き手言語行動の不使用の原因としていくつか考えられる。まず、同一話者同士による対面接触場面(会話例3)と遠隔接触場面(会話例5)を単純に比較すると、対面/遠隔という接触場面に起因した使用傾向の異なりと見られる。そして、音声や映像のずれなどの技術的な制約のため、対面接触とは異なる会話の構築も現れるという吉田(2011)の主張

www.kci.go.kr

通りに、物理的に空間を異にしている学習環境なので、相手の話が理解できなかったり、上手く聞こえなかったりした可能性があり、聞き手言語行動の欠如に直接的に影響したと考えられる。

また、韓国人日本語学習者の目標言語と日本語母語話者の母語という使用傾向から比較すると、学習者の「聞き手言語行動への知識の不足や不定着」「母語(韓国語)の言語運用の影響により聞き手言語行動が必要であるという意識の不在」が原因で、聞き手言語行動の不使用という状況になった可能性も考えられる。ここで再び1.で先述した李舜炯(2017)の指摘に目を向けると「学習者の授業後のレポートから遠隔授業全般における学びの１つとして自然な日本語(特に、あいづちなどの反応の仕方)について毎回のように遠隔講師やファシリテーターからのフィードバックがあった」と報告されている。このことは、毎回、学習項目としてあいづち的反応を学び続けているにも関わらず、簡単には定着できなかったことや必要性を感じていないことなどが聞き手言語行動の不使用に影響したと考えられる。このような韓国人日本語学習者の聞き手言語行動の問題と背景について対面接触場面を考察した李舜炯(2014：438-439)にも同様な指摘がみられる。

次に、日本語母語話者の遠隔接触場面における多用について見てみたい。

吉田(2011)では、日本語母語話者がインターネット接続状況により映像や音声の遅延が起きるとあいづち的発話のずれが生じ、韓国人日本語学習者と発話重複を作ってしまうことが指摘されている。また、尹智鉉(2005)では学習者も日本語母語話者もあいづちと相手の発話との重なりが対面より遠隔で多く、遠隔コミュニケーション特有のインタアクション問題が深く関与していると報告している。このことは遠隔接触場面で、言語使用環境の影響により日本語母語話者の聞き手言語行動の多用が観察されうるとも理解できよう。

では、日本語母語話者のあいづち的反応の多用を示した次の会話例6)から見てみたい。まず、状況としてはコンビニの売り上げをあげるために韓国人日本語学習者と日本語母語話者のやりとりが行われている。

会話例 6) コンビニの売り上げをあげるための遠隔会話：J1,J2(JNS)-K1, K2(KJL)

1 K2: コンビニで販売される商品が作られたらコンビニにもっとお客様がくると思うんですけど,,
2 J2: あ、すみません。もう一回［指で1をジェスチャーしながら］お願いします。
➡ 3 K1: コンビニだけで買える商品が発売されれば(**J1・J2 あー❀**)〈お客様が集まると思うんですけど〉{〈}。
4 J2: 〈ああ、他では買〈えないものですね〉{〈}。
5 J1: 〈ああ、いいですね〉{〈}。
6 K2: なんか、日本のほうがあると聞いたんですけども、(**J1 そう**)〈コンビニだけで買える商品〉{〈}。
7 J1: 〈コンビニだけで〉{〈}
8 K2: コンビニで作られた商品、同じお菓子でも〈［メーカー名］で作られた商品〉{〈},,
9 J1: 〈あー［メーカー名］ブランドみたいな〉{〈},,
➡ 10 K2: もっと安くておいしい評判が（**J1・J2 うん❀**）あればもっとお客様が来てくれないかなと〈思うんですけど〉{〈}
11 J2: 〈ああそうですね〉{〉}

韓国人日本語学習者K1の「コンビニで販売される商品が作られたら～」という発話1K2に対し、2J2で日本語母語話者は指で1をジェスチャーしながら「あ、すみません。もう一回お願いします」とミスコミュニケーションの修復作業を行っている。おそらく、吉田の指摘の通りに遠隔接触という言語使用

www.kci.go.kr

環境の影響で日本語母語話者は学習者の発話が上手く聞き取れなかったのか、理解できていなかったのだと考えられる。その後、3K1で見られるように、先ほどの意見提案者ではない学習者K1が「コンビニだけで買える商品が発売されれば（J1・J2　あー❁）～」と言い換えて発話をしている。ここで日本語母語話者J1とJ2は感声的あいづち表現「あー」で理解を示すと同時に、「❁：「あーあー」と連発したあいづち的反応を行う」ことが確認できる。ここでの(❁)は、1K2の「コンビニで販売される商品が作られたら」で伝達意図が掴めなかったが、3K1「コンビニだけで買える商品が発売されれば」でその発話意図が理解かつ納得できたことを連発したあいづち的反応をもって表していると見てとれよう。しかし、この連発したあいづち的反応が不自然かというと必ずしもそうではない。なぜなら、2人の日本語母語話者J1・J2が同時にあいづち的反応を行っているからである。そして、3K1「コンビニだけで買える商品が発売されれば～」の発話を引き取り、4J2は「ああ、他では買くえないものですね」と共話を成すのはもちろん、5J1でも「ああ、いいですね」と共感を表すあいづち的反応が続いている。そして、6K2で見られるように1K2以来、発話権と取っていなかった学習者K2が発話を再開するという談話展開のきっかけを与え、会話を円滑に進める機能を果たしていると窺える。

さらに、学習者の8K2の「コンビニで作られた商品、同じお菓子でもく［メーカー名］で作られた商品,,」発話を日本語母語話者が引き取り9J1「あー［メーカー名］ブランドみたいな」のように言い換え、補足する形で共話が成される。そして、10K2「もっと安くておいしい評判が（J1・J2　うん❁～」の学習者K2の発話途中に日本語母語話者J1・J2は同時に「うんうん」と連発したあいづち的反応を行っている。ここでも学習者の発話内容に対し、強い同意、共感の気持ちを示していると考えられる。

以上のように、遠隔接触場面における日本語母語話者の連発したあいづち的反応の多用が観察されたが、表現形式とは裏腹にその担っている機能は「納得、理解」「強い同意、共感」の気持ちを表し、談話の流れが円滑に進むきっかけを与えていることが確認できた。このことから遠隔接触という言語使用環境に起因する問題や遠隔接触特有のインターアクション問題とは言い切れないと考えられる。

5. まとめ

本稿では、「テレビ会議システム」を活用した「遠隔接触場面」で韓国人日本語学習者と日本語母語話者がどのように聞き手の言語行動を運用するのかについて、「対面接触場面」との比較を通じて、実証的に分析、考察することを目的とした。

分析、考察の結果、明らかになった主な結果は次の通りである。

1. あいづち的反応の接触場面において、韓国人日本語学習者は、遠隔接触場面(16.3%)より対面接触場面(33.8%)で2倍以上出現率が高いことが明らかになった。一方、日本語母語話者は、対面接触場面(66.2%)より遠隔接触場面(83.7%)で高い割合を示し、相反する傾向を確認できた。
2. あいづち的反応の出現位置において、韓国人日本語学習者も日本語母語話者も遠隔接触場面では、相手の発話途中より発話交替時の出現率が高く、対面接触場面では、逆に発話交替時よりも発話途中の割合が高いことが確認された。一方、発話交替時における共話的反応は一人の学習者に限ってはあるが、遠隔/対面の接触場面に関係なく日本語母語話者並にバラエティに富んだ使用が見られた。

www.kci.go.kr

3. あいづち的反応の表現形式と機能的な側面では、韓国人日本語学習者も日本語母語話者も、感声的あいづち表現と概念的あいづち表現の使用が最も多いことが分かった。また、接触場面と出現位置に関係なく、韓国人日本語学習者より日本語母語話者のほうで使用率が高いことが確認できた。そして、日本語母語話者は接触場面に関係なく、発話交替時では「同意」や「理解」機能を使用し次の発話への足がかりを作る一方、発話途中では相手の話を「傾聴」することで相手の話の展開を促していることが分かった。
4. 遠隔接触場面における韓国人日本語学習者の目標言語の不使用と日本語母語話者の多用という使用傾向が確認できた。韓国人日本語学習者の不使用の原因としては、遠隔接触場面では同じ空間を共有していないことから、共感形成が難しく相手との会話に集中するのが難しい学習環境問題が挙げられる。聞き手言語行動への知識があっても簡単には定着できなかった点や必要意識の不在などが原因の一つとして考えられる。また、遠隔接触場面における日本語母語話者の連発したあいづち的反応の多用は、表現形式とは裏腹にそれが担っている機能は談話の流れを方向づけたり、談話展開のきっかけを与えたりすることが明らかになった。

以上、聞き手言語行動を中心に遠隔/対面接触場面での使用状況の分析と考察を通し、使用数には異同があるものの、全体的な使用傾向においては接触場面の差が多くないことが確認できた。これはJFL環境で遠隔接触の日本語母語話者からリアルタイムで双方向型オンライン日本語教育の可能性を示唆し、JFL環境においても学習の効果も期待できるということであろう。

本稿で見てきたように、ICTを活用した遠隔日本語教育は、空間と空間を越えた地球をつなぐ教育、教室を越えた社会をつなぐ教育ができるようになった。現に、企業などで日本とのビジネス会議場面、日本での就業が決まった外国人の入社前研修などで積極的に活用されていることが報告されている。したがって、多様化する談話環境のなかで遠隔接触場面は授業への応用という教育的な観点だけではなく、日本語を生かした仕事を求める学習者にとっては近い将来直面する場面でもある。特に2020年春、新型コロナの影響で教育全般において、非対面、遠隔、オンラインというキーワードが新しいコミュニケーションとして一種の社会現象となっている。したがって、ますます高度のコミュニケーション能力が要求されている現代社会を理解するためにも、テレビ会議システムのような「遠隔接触場面」での韓国人日本語学習者と日本語母語話者の聞き手言語行動を分析、考察することは、円滑なコミュニケーションに寄与することはもちろん、円滑な人間関係の構築にも役立つだろう。

今回、遠隔コミュニケーションでは韓国人日本語学習者が就職面接で実際行われる多者間ディスカッションを対象としたので、2者間で行われた対面コミュニケーションとは参加者の人数調整はできていない。しかし、言語行動は会話参加者が相互に影響しあう相互作用なので、参加人数による相違についても再考が必要である。これについては今後の課題とする。また、遠隔接触場面における聞き手の言語行動のみを分析対象としているが、沈黙や笑い、手振りなどの非言語行動についても対面接触場面との比較が要求されよう。

【参考文献】

李吉鎔(2017)「語用論・社会言語学研究の現状と展望」『日本語学研究』51、韓国日本語学会 pp.41-56
李舜炯(2014)「韓国人日本語学習者の聞き手言語行動の運用における問題点とその背景」『東北亜文化研

www.kci.go.kr

究』40 東北亜細亜文化学会 pp.433-454
李舜炯(2016)「談話分析からみた日本語学習者と母語話者の聞き手言語行動の実証的研究」 博士論文 首都大学東京（現 東京都立大学）
李舜炯(2017)「韓国慶北大学校CORE事業における遠隔教育―学習者の授業後記から示唆されること―」『日本文化論叢』17 大韓日本文化学会 pp.119-132
李舜炯(2018)「韓国人日本語学習者の接触場面における発話交替時と発話途中のあいづち的反応の機能と表現形式」『日本文化研究』66 東アジア文化学会 pp.223-242
宇佐美まゆみ監修(2011)「BTSJによる日本語話し言葉コーパス(2011年版)」
(http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj-ver.2011.pdf)
柏倉裕美(2016)「多地点を接続した日本語遠隔グループ授業におけるコミュニケーションの問題点―学習者アンケートをもとに―」『bali-icjle2016日本語教育国際研究大会予稿集pdf版Oral&Poster9月10日(土)口頭発表』Bali-ICJLE2016日本語教育国際研究大会
甲賀真広(2017)「学院生主導の遠隔授業運営―マカッサルとテグの実践例―」『日本文化論叢』17 大韓日本文化学会 pp.133-148
小松奈々(2011)「韓国人日本語学習者の意見交換場面における聞き手としての発話」『日本語学研究』31、韓国日本語学会 pp.89-105
永田良太(2004)「会話におけるあいづちの機能―発話途中に打たれるあいづちに着目して―」『日本語教育』120 日本語教育学会 pp.53-62
西郡仁朗(2012)「アジアの都市と遠隔日本語教育―ブレンディド・ラーニングを利用して―」畑佐一味、畑佐由紀子、百濟正和、清水崇文(編)『第二言語習得研究と言語教育』くろしお出版 pp.290-305
洪珉杓(2019)「語用論・社会言語学研究の現状と展望」『日本語学研究』59 韓国日本語学会 pp.67-82
水谷信子(1988)「あいづち論」『日本語学』7-12 明治書院 pp.4-11
柳慧政(2016)「〈共話〉の出現状況の一考察―先行発話に対する聞き手の情報所有の観点から―」『日本語学研究』50 韓国日本語学会 pp.117-132
尹智鉉(2002)「遠隔接触場面における日本語コミュニケーション・ストラテジー」『社会言語科学会第10回研究大会予稿集』社会言語科学会 pp.21-23
尹智鉉(2004)「ビデオ会議システムを介した遠隔接触場面における言語管理―turn-takingと処理過程をめぐって―」『世界の日本語教育』14 国際交流基金 pp.13-52
尹智鉉(2005)「ビデオ会議システムを介した遠隔コミュニケーションにみられる日本語のあいづち使用」『日本研究と日本語教育におけるグローバルネットワーク』2 香港日本語教育研究会 pp.251-262
吉田睦(2011)「多様化する日本語学習者のコミュニケーション場面とその可能性」『第十二回フランス日本語教育シンポジウム論文集』第十二回フランス日本語教育シンポジウム2011フランス・ボルドー pp.180-189
ロング, ダニエル(2017)「大学院生主導の遠隔授業の意義と課題」『国際シンポジウム 越境する日本語学習における遠隔教育の現状と可能性』首都大学東京 (現 東京都立大学) 遠隔教育プロジェクト・慶北大学校人文力量強化事業団(CORE) 日本研究センター pp.11-16

www.kci.go.kr

〈 요 지 〉

ICT를 활용한 원격접촉장면에서의 일본어 학습자와 모어화자의 청자언어행동

본 연구에서는 청각만을 제공하는 전화 통화의 경우와는 달리 청각과 시각을 동시에 제공할 수 있는 「텔레비전 화상회의 시스템」을 활용한 「원격접촉장면」에서 한국인 일본어 학습자와 일본어 모어화자가 어떻게 청자언어행동을 운용하는지를 실제 「대면접촉장면」과의 비교를 통해 실증적으로 분석, 고찰하는 것을 목적으로 하였다.

분석, 고찰의 결과 밝혀진 주된 결과는 다음과 같다.

1. 맞장구적 반응의 접촉장면에 있어서 한국인 일본어 학습자는 원격접촉장면(16.3%)보다는 대면접촉장면(33.8%)에서 2배 이상 출현율이 높은 것으로 드러났다. 한편, 일본어 모어화자는 대면접촉장면(66.2%)보다는 원격접촉장면(83.7%)에서 보다 더 높은 비율로 사용하고 있음을 알 수 있었다.

2. 맞장구적 반응의 출현위치에 있어서 일본어 학습자도 모어화자도 원격접촉장면에서는 상대방의 '발화도중'보다, '발화교체시'의 출현율이 높고, 대면접촉장면에서는 반대로 '발화교체시'보다 '발화도중'의 비율이 높았다. 한편, 발화교체시에서의 공화적 반응은 1명의 학습자에 국한되긴 하지만, 원격/대면의 접촉장면에 관계없이 일본어 모어화자처럼 다양한 기능으로 사용하고 있음이 확인되었다.

3. 맞장구적 반응의 표현형식과 기능의 측면에서는 한국인 일본어 학습자도 모어화자도, 감성적 맞장구표현과 개념적 맞장구표현의 사용이 가장 많은 것으로 드러났다. 또, 접촉장면과 출현위치와 관계없이 일본어 학습자보다 일본어 모어화자의 사용률이 높은 것으로 확인되었다. 그리고 모어화자는 접촉장면에 관계없이 '발화교체시'에서는 '동의'나 '이해'기능으로 맞장구적 반응을 사용하여 다음 발화를 위한 발판을 만드는 반면, '발화도중'에서는 '경청'기능으로 맞장구적 반응을 적극적으로 사용하여 상대방의 담화전개를 촉진하고 있음이 밝혀졌다.

4. 원격접촉장면에서 일본어 학습자의 경우는 거의 맞장구적 반응을 하지 않는 반면, 일본어 모어화자는 많이 사용하는 것이 확인되었다. 우선 일본어 학습자의 대면/원격이라는 접촉장면에 기인하는 사용경향의 차이가 확인됨에 따라, '물리적인 언어학습환경에 따라 대면접촉장면과는 다른 회화 구축이 보인다'는 요시다(吉田2011)의 주장을 지지하는 결과가 얻어졌다. 또, 학습자가 매번 학습항목으로 맞장구적 반응을 배우더라도 쉽게 학습 정착이 되지 못했다는 점과 필요성을 느끼지 못했다는 점 등이 결과적으로 청자언어행동의 결여로 이어진 것으로 드러났다. 아울러, 원격접촉장면에서 일본어 모어화자의 연발적인 맞장구적 반응의 '다용(多用)'이 관찰되었으나, 이러한 연발적인 표현형식은 담화 흐름을 결정짓거나 담화전개의 계기를 제공하는 데에 상당한 기여를 하고 있음이 밝혀졌다.

논문분야 : 사회언어학
키워드 : ICT기반, 청자언어행동, 원격접촉장면, 대면접촉장면, 일본어학습자

▣ 이순형(李舜炯)
경북대학교 강사
soonhlee@knu.ac.kr

■投稿日 : 2020년 3월 30일
■審査開始 : 2020년 4월 25일
■審査完了 : 2020년 5월 19일
■掲載確定 : 2020년 5월 27일

www.kci.go.kr